



「いなびかり」の季語は、なぜ秋なの

かみなりは夏、稲光は秋

夕立のときなどに、ゴロゴロと鳴るかみなりは、夏の季語ですが、かみなりの前にピカッと光る「いなびかり」は、秋の季語です。「いなびかり」は、稲妻と同じ意味で、漢字では稲光と書きます。

稲光によってイネの穂が実る

昔の農民の間では、イネが、稲光によって、霊のようなものと結ばれ、穂を実らせると、信じられていました。かみなりは、夏に多いのですが、暗い夜に、かみなりの音は聞こえず、稲光だけが光っている、ということは、秋に多いのです。秋は、イネが実る季節であることから、稲光はイネの実りと関係がある、と考えられ、稲光とか稲妻ということばが生まれた、といわれています。

稲光は稲妻と区別されていた

江戸時代の初めごろは、稲光と稲妻は区別され、稲妻だけが季語とされていました。今日のように、稲光は稲妻と同じ意味であるとして、季語になったのは、元禄(1688~1704年)のころからです。ただし、俳句に、稲妻が使われることは多いのですが、稲光は、あまり使われません。

秋の季語のいろいろ

このほかにも、秋の季語は、たくさんあります。天文に関するものでは、月・名月・三日月・天の川・流星など。動物では、シカ・イノシシ・スズムシ・サンマ・イワシなど。植物では、アサガオ・ラン・キク・コスモス・カキ・クリ・ブドウ・レモン・スイカ・カボチャなど。また、七夕・花火・運動会も、秋の季語です。(監修・田代 脩)

